

# 宮崎県五ヶ瀬町浄専寺所蔵「大般若経」奥書

甲斐素純

はじめに

宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町には、約六〇〇年前に大分県玖珠郡玖珠町の関連神社（船岡八幡宮）やお堂（阿弥陀堂）にもともと奉納されていた大般若経（同町浄専寺所蔵）や鰐口（同町観音堂所蔵）が、なぜか現存している。また『阿蘇家文書』などをみても、玖珠地方は一時期肥後阿蘇氏の勢力が及んでいたことが分かる。しかしこれらを論じた記述は、今まで何もないと言っても過言ではない。そこで『玖珠町史』の編纂・執筆を機に、本格的な調査を試みた。

なお大般若経をこれまでに調査したのは、肥州雲林庵の僧で、慶安二年（一六四九）五月二十四日「一遍読誦」している（経櫃の箱の上蓋墨書銘）。

次に記録に残るのは积非宝氏で、同氏の成果としては「西麓高千穂二上大明神社殿と別當観音寺に就て」という昭和十年執筆の孔版がある。大般若経は現在町指定であるが、同寺住職（寺本哲郎氏―元町教育委員長）の談によると、「大般若経に対する、これまで大学や研究機関・専門家の調査研究はない」とのこと。

かつて玖珠でも、先方からの連絡で小田原三八氏が宮崎県内に船岡八幡宮関連のお経本があるらしいことを話していたが、未調査のままであった（地元の古老談）。筆者は別件の調査（大友氏研究）で、昭和六十三年一〇月大般若経の所在を『五ヶ瀬町史』で知り、郷土史家の西川功氏の紹介でその一部を調査させていただいた。その成果は、渡辺澄夫氏編の『豊後国荘園公領



～ 大般若経の整理状況 ～ (200巻目を終えた状態)  
(玖珠町教育委員会提供・以下同じ)

史料集成』第八卷(上)の「長野荘」にも、収録されている。

前回の調査では、六〇〇巻もの大量の経本でもあり玖珠関係の貴重資料とは知りつつも、全巻調査には至らなかった。しかし今回は『玖珠町史』の編纂ということで、全調査を終了することができた。調査者は、大分県立歴史博物館の調査課長渡辺文雄氏と玖珠町史編纂係長梶原政純氏と筆者の三名で、平成一〇年十一月十七日から十九日の二泊三日で行った。

調査は帙や唐櫃・経本の計測と、それらに無造作に入れられた経本を巻数別に整理し(広い本堂全体に広げ)、奥書のある物は全て写真収録した。また欠本を調べ、破損状況等もチェックした。

大般若経とそれらを入れる収納物である帙・唐櫃など、あるいは大般若経自体の書誌学的考察については渡辺氏に譲ることにして、ここでは大般若経の奥書を紹介する(『玖珠町史』では、紙数の都合で割愛した)。なおこの大般若経は、元々玖珠町長野の船岡八幡宮に奉納された物であるが、それがなぜ高千穂地方に移動したのであるかについては、『玖珠町史』(平成十三年三月・玖珠町役場)上巻の第三編第五章第一節の「阿蘇氏の影響」に於いて詳述してあるので、合わせ参照されたい。

一、淨専寺所藏「大般若経」奥書

卷数	奥書
第一卷は欠本	
二	長壽賀能書
三	筆者守真
四	守真書之
十	長壽賀能書
十一〜十五	了心書之
十七	了心書分 山香淨妙寺住僧西運書之
十八	右筆沙弥了心
十九	了心書之
二十一・二十二	長壽賀能書
二十四	守真書之
二十六	長壽賀能書
二十九	長壽賀能書
三十	長壽賀能書
三十一	於山香長吉勸進書写分
三十二	黄、於山香長吉勸進書写分
三十三〜三十六	於山香長吉勸進書写分
三十七	山香分、了心書之
三十八・三十九	於山香長吉勸進書写分

卷数	奥書
四十一	字、桑門 守繼書
四十二	字、桑門 守繼書之
四十三	字、桑門 守繼書
四十五	字、桑門 (虫)書之
四十六	山香祥光弟子 守繼書
四十七	桑門 守繼書之
四十九	〃、筆者圓祐
五十	祥兼書
五十一	大日寺比丘宗□書之
五十二	長壽 賀能書
五十四	僧寶納 (虫)
六十二~六十七	能州人願成寺主慧文助筆分
六十八	慧文助筆分
六十九	能州人願成寺主慧文助筆分
七十二	長壽 賀能書
七十三	長壽 賀能 (虫)
七十九	僧善慶書之
八十一	長壽 賀能書
八十二~八十五	長壽 賀能書
九十一~九十四	祥兼書
九十六~一〇〇	〃

一〇二	奧州伊達沙門長雅書之
一〇三	奧州伊達桑門長雅書之
一〇四	奧州桑門長雅書之
一〇五	奧州伊達桑門長雅書之
一〇六	奧州伊達沙門長雅書之
一〇七	奧州伊達桑門長雅書之
一一一	長壽 賀能書
一一二	奧州伊達比丘長雅書之
一一三	長壽 賀能書
一二四	守令書
一二五	僧守令
一二六	長壽 賀能書
一二八	清原兵庫頭泰書
一二九	守令書之
一三〇	長壽 賀能書
一三一	奧州伊達桑門長雅書之
一三八	〃
一四一	山香延福寺住持 宏真書之
一五一	比丘 榮勝書之
一五三	榮勝書分
一五五	比丘 榮勝書之
一五六	比丘 榮勝書之

卷 數

奥

書

一六一～一六七

奥州伊達桑門長雅書之

一七二

清原頭泰書之

一七三

清原兵庫助頭泰書

一七四～一七八

〃 之

一七九・一八〇

清原兵庫助頭泰書

一八二～一八四

慈氏院祥兼書之

一八七～一八九

〃

一九一～一九三

長壽 賀能書

一九四

守真・守令兩筆

一九八

沙門守真書之

二〇〇

長壽 賀能書

二〇一～二〇九

奥州伊達沙門長雅書之

二一〇

長雅書之

二一一～二一六

客僧永府書之

二一七

肥後菊池桑門素範書

二一九・二二〇

長壽 賀能書

二二二

臥龍庵主同穎書之

二二四～二二九

〃

二三一

耕靜寺住持善宗書 皆應永十二歲乙酉□夏□旬日

二三二・二三三

耕靜寺住持善宗書

二三五

〃

二二六	善宗書之
二二七	耕静寺住持善宗書
二二八	耕静寺住持善宗書、 峇應永十二歲乙酉五月中旬之書(积非宝氏調查分)
二四〇	耕静寺住持善宗書
二四二~二四九	伊勢二見慈氏院祥叢書
二五一~二五五	比丘祥敷領掌 筆者祥轉
二五七~二五九	〃
二六一~二六三	桑門守靈書之
二六五~二六九	〃
二七〇	守靈書之
二七二・二七三	沙門守真書之
二七四	退藏沙門守真書之
二七五	守真書
二七六~二八〇	長壽 賀能書
二八一~二八五	奥州伊達桑門長雅書之
二八六	長雅書之
二八七・二九〇	奥州伊達桑門長雅書之
二九一・二九二	長壽 賀能書
二九四・二九五	奥州伊達 長雅書
二九六	肥後菊池桑門宗範書
二九八・二九九	長壽 賀能書
三〇一	干時應永十二歲次乙酉林鐘上旬日書、干意山寶光寺南軒之下 沙門大圓有乘(积非宝氏調查分)

卷 数

奥

書

三〇二

乘書記書分 干時應永十二季乙酉歲林鐘二朔書之

三〇三

應永乙酉季夏下旬日、釋大圓書之

三〇四

干時應永歲次乙酉仲秋初三日、大圓叟書之

三〇五

應永十二年歲次乙酉南呂初八日、大圓叟書之

三〇六

應永十二年歲次乙酉仲秋十八日、大圓叟書之

三〇七

應永十二年歲次乙酉八月廿五日、大圓書之

三〇八

干時應永十三年丙戌暮秋中旬、書寫畢、大圓叟

三〇九

應永丙戌歲南呂下旬日書寫、大圓叟

三一〇

住持比丘賀能 干時應永十三季丙戌暮秋初六、書之

三一〇

石城寺住持書分 皆應永十二歲次乙酉林鐘初九日、助筆心岩宗輩筆

三一三

石城寺住持書分 皆應永十二祀歲次乙酉仲夏念又六日、助成宗輩筆

三一四

石城寺住持書分 皆應永十二并歲次乙酉林鐘初八日、石城宗輩筆

三一五

石城寺住持書分 皆應永十二歲次乙酉小春初二日、石城住心岩叟筆之、

三一六

干時應永十二之天歲次乙酉三伏朔日、於豐之耕了石城分

三一七

石城寺住持宗輩筆分 皆應永十二季歲次乙酉南呂念五日、天承比丘玉峯至玖叟書

三一八

石城寺住持宗輩書之

三一九

石城寺住持書分 皆應永第十二祀歲次乙酉小春望日 石城住心岩叟宗輩筆

三二〇

石城寺住持書分 皆應永第十二祀歲次乙酉霜月初八日、石城住心岩叟宗輩筆

三二一

惠日寺禮端書 於豐後州球珠郡古後郷志津里村惠日寺寫畢、皆應永第十二□仲夏下旬日 比丘的翁叟之書

三二二・三二三

惠日寺禮端書

三二五

〃 皆應永十二歲乙酉林鐘上旬日



三二六	三二八	惠日寺礼端書
三二九		皆應永第十二歲乙酉林鐘下旬日 惠日寺礼端書
三三〇		惠日寺礼端書 (虫)林鐘下旬日 誌之
三三一	三三五	伊勢州二見慈氏祥兼書
三三六		慈氏院祥兼書之
三三七		伊勢州二見慈氏院祥兼書
三三九		慈氏院祥兼書之
三四〇		伊勢州二見慈氏院祥兼書
三四一		應永十二年五月六日 前報恩頭陀比丘周持
三四二		應永十二年五月八日 //
三四三		// 五月十日 前報恩頭陀比丘周持書
三四四		前報恩比丘周持書
三四五		應永十二年五月十四日 前報恩頭陀比丘受溪周持
三四七		應永十二年五月十七日 前報恩頭陀比丘受溪周持
三四九		// 五月廿一日 //
三五〇		應永十二年五月廿四日 前報恩頭陀比丘受溪周持書
三五二	三五八	奧州伊達 長雅書之
三六〇		//
三六二	三六六	伊勢州二見慈氏院祥兼書
三六八	三六九	伊勢州二見慈氏院祥兼書
三七二	三七六	奧州伊達 長雅書之
三七八	三八〇	//

卷 数	奥 書
三八一	助筆施無畏寺住持禪芳
三八二・三八三	施無畏寺住持禪芳書之
三八四	肥後州沙門宗範書
三八五・三八八	長壽 賀能書
三九一・三九二	肥後州桑門 素範書之
三九三	素範書之
三九四・三九八	肥後州桑門 素範書之
四〇〇	素範書之
四一一・四一二	桑門 守光書之
四一四	〃
四一六・四一九	桑門 守光書之
四二一・四二四	廣瀨證定坊圓致書之
四二五	證定坊圓致書之
四二六	廣瀨證定坊圓致書之
四二八・四三〇	〃
四三一・四三二	豊後國速見郡山香郷小武寺住侶金剛佛子圓滿書之
四三三・四三四	圓崇書之
四三五	廣瀨中納言圓崇書之
四三六・四三九	廣瀨中納言圓崇書之
四四〇	住持賀能 廣瀨中納言圓崇書之

四四一	豐後國山香鄉小武寺住侶書寫畢 金剛佛子圓滿廿五
四四二	金剛佛子圓滿書 豐後國速見郡山香鄉小武寺住侶
四四三	豐後國速見郡山香鄉小武寺書寫畢 金剛佛子圓滿
四四四	〃 〃 兵部圓滿
四四九	玉
四五一	山香神宮寺坊主 應永十三年丙戌年二月中旬令書寫畢、右筆圓海
四五二	山香神宮寺坊主 右筆遍照金剛圓海
四五三	〃 干時應永十三年丙戌三月十八日 右筆沙門圓海
四五四	山香神宮寺坊主應永十三年丙戌正月十一日 筆者 圓海
四五五・四五六	山香神宮寺坊主圓海書分
四五七	山香神宮寺坊主 應永十三年丙戌卯月一日 右筆沙門圓海
四五八	山香神宮寺坊主 應永十三年丙戌卯月十五日 右筆沙門圓海
四五九	應永十三年三月十七日 右筆藤原致高 山香神宮寺坊主助筆分
四六一	干時應永十三年沽洗中句書寫訖、愚筆興雲
四六二	〃 丙戌林鐘下旬寫功訖、興雲
四六三	干時應永十三年丙戌卯月晦日摸之訖、染翰愚毫興雲
四六四	干時應永十三年天丙戌蕤賓仲句書之了 染毫興雲
四六五	干時應永十三年林鐘下旬書寫訖、愚毫興雲
四六六	〃 十二天丙戌夷則上旬書寫訖、染毫興雲
四六七	干時應永十三年丙戌南呂上候書功訖、愚毫興雲
四七〇	興雲書分
四七一	長壽 賀能書

卷 数	奥	書
四七二・四七三	山香觀行坊書分	
四七五～四八〇	〃	
四八一	山香田所志手左衛門尉、右筆者沙弥了心	
四八五	山香田所志手左衛門尉、右筆沙弥了心	
四八七～八四九	〃	
四九〇	長壽住持賀能	
四九一～四九八	山香式部殿書分	
五〇三・五〇七	伊勢州二見郡慈氏院祥美書之	
五一二	施無畏寺住持比丘禪芳書之	
五一四	清原兵庫助顯泰書之	
五一五～五一七	長壽 賀能書	
五二一	長壽賀 (虫)	
五二三～五二五	長壽 賀能書	
五二六	比丘守靈書之	
五二七	退藏軒主守真書之	
五二九	長壽 賀能書	
五三一	平井金剛寺住持珠宅書之	
五三二	金剛寺珠宅書之	
五三三～五三六	平井金剛寺住持珠宅書之	
五三七	金剛寺珠宅書之	
五三九・五四〇	平井金剛寺住持珠宅書之	

五四一	桑門守靈書之
五四二・五四三	長壽 賀能書
五四四	清原兵庫助頭泰書
五四五	伊勢州二見郡慈氏院祥義書之
五四六	長壽 賀能書
五四七	退藏軒主守真書之
五四八	清原兵庫助頭泰書之
五四九・五五〇	退藏軒主守真書之
五五一～五五三	龍象庵主光音書記書分
五五四	〃 助筆分也
五五五・五五七	龍象庵主光音書記書分
五五八	音書記書分
五五九	龍象庵主光音書記書分
五六〇	龍象〔虫ニテヨメズ〕音書記書分
五六一	應永十年三月廿六日、筆者藤原致高(釈非宝氏調査分)
五七一・五七三・五七六	退藏軒主 守真書之
五七七	長壽 賀能書
五八〇	守真書
五八一	桑門 守靈書之
五八二	清原兵庫助頭泰書之
五八三	桑門守靈書之
五八四	守靈書之

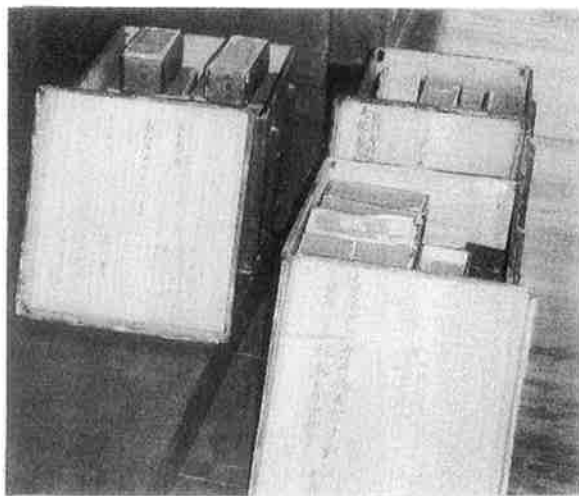
卷数	奥書
五八五・五八六	桑門 守靈書之
五八七	清原兵庫助顯泰書之
五八八	書
五八九～五九三	長壽 賀能書
五九五～五九九	〃

用語解説  
 △備考▽ 奥書の最後には経巻数を示しているが、その前には必ず「玖珠郡長野八幡宮経也、化縁順倫」と記してある。

霜月	旧暦の十一月の異称	用語	解説
蕤賓	旧暦の五月の異称	用語	解説
暮秋	旧暦の九月の異称	用語	解説
仲秋	秋の半ば、旧暦の八月	用語	解説
林鐘	旧暦の六月の異称	用語	解説
桑門	僧	用語	解説
望日	旧暦の十五日	用語	解説
三伏	真夏	用語	解説
頭陀	僧が托鉢して修行して歩くこと	用語	解説
南呂	旧暦の八月の異称	用語	解説
姑洗	旧暦の三月の異称	用語	解説
夷則	旧暦の七月の異称	用語	解説
比丘	出家した男の僧↓比丘尼	用語	解説
卯月	旧暦の四月の異称	用語	解説
仲夏	旧暦の五月の異称	用語	解説
峯	時の古字	用語	解説
小春	旧暦の十月の異称	用語	解説
沙門	僧・出家	用語	解説

## 二、大般若經の筆者と書写年代

六百卷の大般若経は、四十人前後の僧たちによって書写されている。この内巻末の奥書にその分担当が明記されている物の内、最も多くの巻数(計八十一巻)を筆写したのは「長壽、賀能」である。この長壽とは、玖珠町大字塚脇長野の船岡八幡宮(応神天皇・清原正高を祀る。別名、新宮八幡)の神宮寺清和山「長壽院」のことで、当然と言えば当然だがここの住持賀能が、その多くに関わっている。



～ 六〇〇巻を収納する唐櫃(三箱) ～

次に書写の多いのが、奥州伊達の「沙門長雅」で六十九巻を受持ち、伊勢二見郡の慈氏院の「祥兼」が二十八巻、「守令(靈)」が二十一巻、退蔵軒主「沙門守真」十七巻、山香「沙弥了心」が十五巻を、肥後菊池の「桑門素(宗)範」が十二巻を担当している。この内長雅や祥兼・素範などは、恐らく客層として長期逗留中に加勢したものと思われる。

「客層」と記した「永府」も、計六巻を書写している。この外に能州(能登)願成寺主の「慧文」(計八巻)や他の僧たちも、修行の途中宿舎などで長寿院や船岡八幡宮へ立ち寄り、助筆したものと思われる。ここ玖珠は、英彦山と阿蘇両修験霊場の中間に位置し、九州の中央部にあつて豊前・筑前・肥後への交通の要衝でもあつた。

大般若経の書写で注意を引くのは、山香の僧たちである。山香の淨妙寺・祥光寺・延福寺・小武寺・神宮寺・観行坊・山香広瀬の證定坊などが、係わっている。大永三年(一五二三)十一月二十日付の「山香郷社社

菓樹香樹鬢樹寶樹寢樹諸難飾衡周遍症  
 巖甚可愛愛如衆蓮華世界普花如未淨起  
 妙吉祥菩薩任慧菩薩及餘無量大神  
 力菩薩摩訶薩本任其中  
 玖珠郡長野藩宮内  
 化縁源倫  
 大般若波羅蜜多經卷第二  
 長壽賀能書

領覚書案<sup>2</sup>によると、当時の「上浄妙寺・祥光寺・延福寺・小武寺・神宮寺」  
 などの寺領の面積が記されている。『豊後國志』（速見郡）によると、山香町立  
 石にある「長流寺」（旗本木下家の菩提寺）は、もと合名山延福寺の跡で、立石  
 府主木下延由がそこに長流寺を興した。

山香町倉成の正高寺<sup>しょうこうじ</sup>（曹洞宗）は清原正高ゆかりの寺であり、かつては「祥光寺」と記していた。また「観行坊」は山香町内  
 河野の西明寺（無住）のことで、同寺は六郷山本山分末寺の一つで、『図跡考』によると中世には成前坊・観行坊・地鎮坊・普  
 門坊・山の坊・奥の坊の六僧坊があったが、大友宗麟の焼打ちにあい焼失したという。

このように山香の多くの寺や人々が書写に関わったのは、玖珠の長野氏の関係によるものと思われる。永享七年（一四三五）  
 八月九日付の長野左馬助あての大友親綱知行預ヶ状<sup>3</sup>によると、玖珠郡内長野三分二六町と荏隈郷内十貫分長野紀伊介跡と山香  
 郷内綾富三町を預け置かれている。玖珠の長野氏と山香を結びつける史料はこれが最も古いようであるが、恐らくそれ以前こ

～ 第二巻の奥書と経を収納する帙（2種類）～





の大般若經書写以前に、長野氏と山香とが所領宛行などで結びついていたものと思われる。

渡辺澄夫氏は『豊後国莊園公領史料集成』第八卷(上)において、山香の長野末夫文書の惟宗某打渡状(応永二年三月九日、古後郷内長野村、惟宗↓長野長門)・志手文書の九州探題波川満頼遵行状案(応永七年九月十日、玖珠郡内長野村地頭職、右兵衛佐↓大友修理権太夫)・長野末夫文書の沙弥正言讓状案(応永九年卯月二十日、玖珠郡長野村田地十町之内三分一外、正言↓親治)・同じく大友親綱知行預ヶ状(永享七年八月九日、玖珠郡内長野三分二六町外、親綱↓長野左馬助)を「長野荘」に入れている。「古後郷内長野村」については検討を要すとしている。なお渡辺氏は、「古後郷」の項にもこれらを収録し検討課題としている。

筆者はこれらの古後郷内長野村を初めとするこの時期の長野氏に関わる長野村は、長野荘の長野ではないと考えている。具体的には、旧古後郷山下(玖珠町大字山下)の「長小野」を比定している。大般若經の奥書にも出てくる、古後郷内平井(金剛寺)や志津里村(恵日寺)も同郷内で、あまり遠くない位置にある。また「大日寺」は、志津里の日隈久己氏宅裏のクヌギ林の所にあつたという。ここにあつた石造の地蔵様は、現在近くの貴船社内に移されている。前報恩頭陀比丘と称する「報恩寺」は、大字綾垣(古後郷)の中丁藤井利八氏宅屋号(門名)として、「ふおじ・ふうおんじ」と称し存在した。また「臥龍庵」というのも、綾垣の中丁に通称名として残っているという。また約六〇〇年前には、確かにあつたはずの志津里の「恵日寺」や平井の「金剛寺」は、現地調査で古老に尋ねたが、判明しない。ただ平井の星野文夫氏談によると、自身所有の山林には五輪塔などが散在し、そこは寺跡だという。寺名までは判明しないが、金剛寺跡であろうか？

大般若經書写に関わつた俗人としては「清原兵庫助顯泰」が計十六巻と、藤原致高(山香町の工藤氏か)が計二巻を担当している。釈非宝氏の調査書によると、大般若經の書写は「何れも靈筆達筆の揃ひであるが、愚毫輿雲と俗人清原兵庫助顯泰のものも最も勝れてゐる」という。

地元玖珠の人々としては、長壽院の賀能以外にこの清原顯泰や、古後郷志津里村の恵日寺の礼端が計九巻を、また平井金剛

寺住持の珠宅が計九巻を書写している。さらに応永十二年八月二十五日に第三二七巻を書写し終えた「天承比丘玉峯至玖」は、帆足郷若宮八幡天承庵の庵主であり、その本尊として如来形座像を大壇那清原真人左京助(法名宗通)のもとに応永四年(一三九七)十二月十三日造立している(若宮八幡社所蔵<sup>6</sup>)。この天承庵は、若宮八幡社参道前に通称名として残っている(現状は、田)。若宮八幡社の神宮寺天承庵の庵主玉峯至玖は、船岡八幡社奉納の大般若経に、石城寺住持の書分を肩代わりして、執筆・助成をしている。

なお、参考までに記すが、現在広島市西区田方にある「草津八幡神社」所蔵の大般若経(広島市指定文化財)の四百二十巻の奥書によると、「豊後州球珠縣内帆足郷 清原氏女、大島比丘尼宗範」が旦那となり、この大般若経の執筆(月舟)を助成したとある。時に明德四年(一三九三)二月十一日で、旦那・助成は「現世安穩、後世善處」のためであった<sup>7</sup>。本経は、大願主豊前国下毛郡宮永西沙弥玄嘉・勸進聖觀照坊聖快が中心となり、十方旦那の合力により書写奉納したものである。その結縁旦那は、三河国・肥前国・豊前国・肥後国・筑後国などに及んでいる<sup>8</sup>。玖珠帆足の旦那清原通房・帆足郷住僧圭満や、この友竹庵宗範が関係した経本が、現在では遠く安芸国まで移動している。

さらに第三二二巻から第三二〇巻の奥書にある「石城寺」は、玖珠のどこにあつたのであろうか。「清原姓長野氏系図」によると、正高の孫助道の四男通遠の子孫に、「石城寺」を名乗る人物がいる。それは、小倉神社を造営した小田時成の末弟にあたる人物である。

次に大般若経の書写年代を見ていくと、紀年銘のある巻数は計四十一巻である。この内最も古い紀年銘は五百六十一巻の「応永十年(一四〇三)三月廿六日」で、最も新しい物は三百八巻の「干時応永十三丙戌暮秋中旬」である。浄専寺の大般若経は、これらの時期と相前後して書写されたことがわかる。

また各巻の筆者日数をみていくと、釈大圓は三百四巻を八月三日に、次の三百五巻を同月八日に、三百六巻を同月十八日に、三百七巻を同月二十五日に、それぞれ書写し終えている。そして次の三百八巻は、翌十三年の九月中旬に書写している。また

三百九巻は同年の八月下旬に、三百十一巻を同年九月六日に書写している。この後には大般若經の写経は、梵文の母数を大員とそれらに伴う諸経費が必要であり、六〇〇巻の写経は並大抵ではなかったようだ。

注

(1) 『玖珠町の寺院と文化財』(平成元年三月・玖珠町教育委員会)によると「長寿院が元禄年間(一六八八—一七〇四)の創建と伝えるが、各々の本尊の古さから、その前身寺院の存在が考えられる。とくに、長寿院の本尊阿弥陀如来は平安後期の作であり(四頁)」という。長寿院は現在無住で長野公民館となっているが、ここには伐株山の高勝寺と関係するというより、船岡八幡宮と関係が深い。

(2) 『豊後国莊園公領史料集成』第四卷(上)、山香郷一四三号

(3) 『豊後国莊園公領史料集成』第四卷(上)、山香郷八二号

(4) 『大分県の地名』(一九九五年二月・平凡社)玖珠郡古後郷長野村の項参照(筆者執筆)

(5) 「西麓高千穂二上峯大明神社殿と別當観音寺に就て」(孔版)、昭和十年正月二十八日

(6) 『豊後国莊園公領史料集成』第八卷(上)帆足郷五三三号

(7) 広島市の文化財三十三集、『大般若波羅密多經調査報告』(昭和六十一年三月・広島市教育委員会)

(8) 『豊後国莊園公領史料集成』第八卷(上)、三六八—三七〇頁

(9) 『大分県郷土史料集成』上巻所収

(大分県玖珠郡九重町大字松木)